

# 伝承の形式からみる神楽の位置づけと状況

——大償内野口法印流神楽について——

中 嶋 奈津子

## 【抄録】

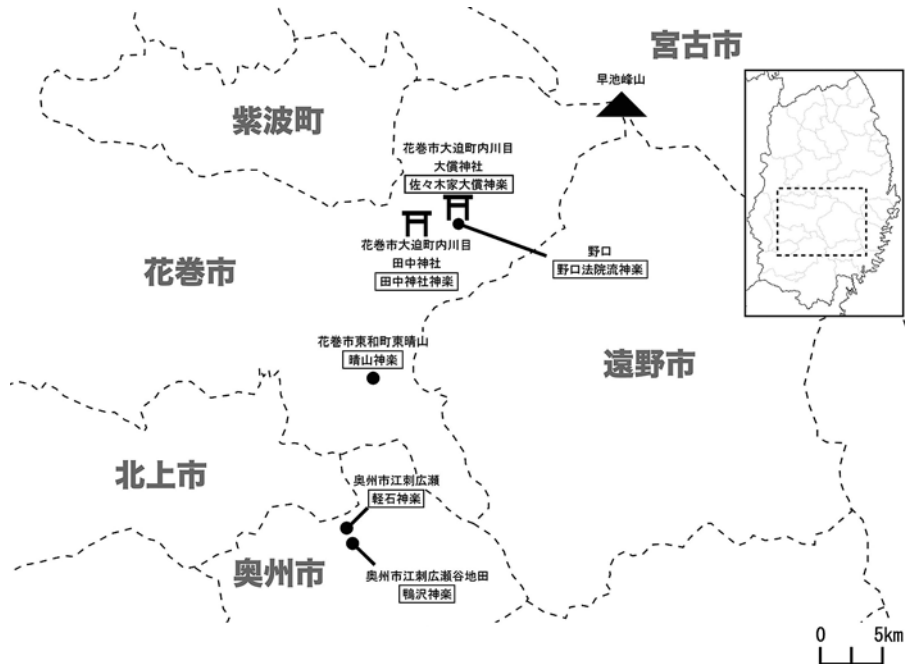
岩手県花巻市大迫町大償には早池峰大償神楽（ユネスコ無形文化遺産登録）が伝承される。大償にはもう一つ、「大償内おおつくないいんべり齋部流野口家流式神楽（以下、野口法印流神楽）」が存在した。この神楽は、大償野口の宝乗院善妙が文化（1804年～）時代に既存の神楽に神道式を取り入れて新しく改変した神楽であることが伝えられ、江戸時代後期に途絶えたが、現在でもその流れを汲む神楽が県内に複数存在している。同地域内にある早池峰大償神楽との情報が混同していて、本来の野口法印流神楽像が明確になっていない。本論では、弟子神楽に残された奥付書や舎文から得られる情報を整理して、これまで不明瞭であった野口法印神楽像とその位置づけを明確にすることを試みた。また調査により明らかになった特徴的な伝承形式から、早池峰大償神楽との違いを検討した。

キーワード：修験系神楽、早池峰大償神楽、神楽の神道化、弟子神楽、伝授書

## はじめに

岩手県花巻市大迫町には、複数の修験系神楽が伝承されている。この中でもとくに北上山地の主峰早池峰山麓の二つの集落に伝承される早池峰神楽（早池峰たけ岳神楽・早池峰おおつくない大償神楽の総称）は「山伏神楽」として知られている。この神楽には早池峰流を名乗る多くの弟子が存在し、師弟構造を有しながらそれぞれ500年以上の時を超えて伝承されてきた。一方、この岳神楽・大償神楽の周辺に、江戸時代まで盛んに営まれていたもう一つの神楽が存在していたことはあまり知られていない。それが大償内おおつくないいんべり齋部流野口家流式神楽（以下、野口法印流神楽とする）である。野口法印流神楽は、「大償野口の宝乗院善妙が、文化（1804年～）時代に既存の神楽に神道式を取り入れて新しく改変した神楽」であることが伝えられる。この「既存の神楽」については「岳神楽」や「大償神楽」とも言われているが、この神楽自体が天保年間（1830-44）に途絶えているためにその詳細はわからない。しかしながら、この神楽の弟子が今も複数存在していて、所有する奥付書や舎文からおおよその神楽の様子を知ることができる。

筆者は早池峰神楽の調査の中で、野口法印流神楽の資料に触れる機会が度々あり、早池峰大償神楽との情報が混同していることに気が付いた。そして自身の研究テーマ「早池峰神楽（とくに



地図 1

大償神楽)の継承と伝播」を明らかにする上で、野口法印流神楽についての情報を整理しその位置づけを明確にする必要を感じた。よって本論では、野口法印流神楽像を明確にするために弟子筋の資料や先行研究を整理するとともに、調査により明らかになった特徴的な伝承形式から、早池峰大償神楽との違いを検討した。(地図1、写真1)



写真1 鴨沢神楽 (2017年10月 筆者撮影)

## 1 野口法印流神楽の先行研究－多様に捉えられる「大償野口法印流神楽」

野口法印流神楽については、森口多里、菅原盛一郎、小形信夫、門屋光昭、大阿久国賢らが報告している。その実態が明かでないために、芸態や神楽の内容については流れを汲む晴山神楽・鴨沢神楽・峠神楽などを通して論じられている。しかしながら、継承と伝播に触れる報告は少ない。

まず、晴山神楽・猿沢峠山伏神楽に伝承される来歴についての一文を、以下に掲載する。

「晴山神楽は天保6年(1835)の飢饉の折、大償神楽組が道具一切を持って和賀郡東晴山に

移住して伝えられ、さらにそれが奥州市江刺区広瀬の鴨沢と軽石、猿沢に伝わったとされている。」「猿沢峠山伏神楽」『岩手県の民俗芸能』<sup>(1)</sup>

「峠（大東町）に伝わっている神楽はおそらく内陸における早池峯神楽の伝流の南限かと思われるが、この神楽組に伝わる文久四年正月の写本に「大償野口齋部流」と書いてある。」

「（略）和賀郡東晴山に伝わる大償神楽の流れを汲む山伏神楽野口流の教えを受け、これを習得して峠地区の青少年に健全娯楽として教えた」『岩手の民俗芸能』<sup>(2)</sup>

上記はいずれも野口法印流神楽についての記述であるが、下線部のように「大償神楽組が」あるいは「早池峰神楽の」という表記で、野口法印流神楽＝早池峰大償神楽、もしくは早池峰神楽のひとつとして捉えられていて大償神楽と混同されている。これについて、野口法印流神楽の位置づけ、大償神楽との関わりについて確認してゆきたい。小形信夫は野口法印流神楽の流れを汲む鴨沢神楽に伝わる伝授書を踏まえて、以下のように述べている<sup>(3)</sup>。

「天保6年（1835）に大償野口の宝乗院善妙が晴山（東和町）に伝えた「齋部流大償内野口家流式」は宝乗院が忌部兼春創出と伝える「齋部秘伝神楽本記」と典拠として山伏神楽の改作を試みたもので、やはり唯一神道を思想背景として舞曲の解釈を行い、「機織」等の創作演目を新たに加えるなど改変の形跡が認められる。しかし総じては、山伏神楽の芸態をしての様式、内容、演技法等は、旧態を維持し改変に至らなかったと思われる。」

また、森口多里は『岩手の民俗芸能』<sup>(4)</sup>の中で、野口法印流神楽について、峠神楽に伝わった神楽はおそらく内陸における早池峰神楽の伝流の南限であろうこと、そして東和町の晴山神楽所伝の奥付書には「齋部流神楽本式」および「大償内野口家流式」（天保6年2月神楽始）とあるから「大償神楽が野口式とか齋部流とか称していた時代があったことは確かである。」と、大償神楽＝野口法印流神楽として分析している。これと逆の見方をしているのは菅原盛一郎であり、『日本之芸能早池峰流山伏神楽』<sup>(5)</sup>の中で

「この「野口家流式」と称する大償内神楽は、今の大償神社の大償神楽すなわち田中神社より分流した大償神楽の事ではなく、それとはまったく別流派の神楽であって、これは大償内の住民天台派の野口法印が既存の神楽、即ち岳神楽 内堀神楽に齋部流派の神楽を配して創作したと称する所以、野口流神楽の事である」<sup>(6)</sup>

と述べ、野口法印流神楽と大償神楽とは別流であることを強調していて、むしろ岳神楽ほか既存の神楽を改編した旨を主張している。大阿久国賢は論文「大償内野口齋部流鴨沢神楽の概要」<sup>(7)</sup>の中で、諸氏の論文を受けて大償神楽と鴨沢神楽の舞振りが大きく異なり、「同流であるとはとても思えない」と述べている。一方、大正9（1920）年に早池峰大償神楽の弟子向田瀬神楽から伝承された倉沢神楽は、大償神楽が直接関わることもない孫弟子であってもその舞降が大償神楽と近似していることを加えている。諸氏ともに神楽の内容を比較する視点で、野口法印流神楽と早池峰大償神楽は異なる部分が多いとの見解であるが、野口法印流神楽を早池峰系と捉えるか別流とするかについては意見が分かれる。

## 2 大償野口法印流神楽の歴史的背景

本論では、野口法印流神楽と早池峰大償神楽との関わりがあるのか、否かがひとつの論点となるが、それを踏まえて時代背景とその関連性を先行研究からみてゆきたい。

### ①齋部流野口法印流神楽成立以前の、「野口の法印一寿院」と大償権現別当佐々木家との関連

田中明神別当山陰家と大償権現別当佐々木家、その神楽との関係を『大迫町史』では「山陰文書」<sup>(8)</sup>から以下のように述べている。早池峰山霊を奉祀する田中明神別当山陰家の奉祀する神楽を「田中神楽」と呼称した。この神楽が大償権現三社別当へ神楽を伝授したと伝えられる。「山陰文書」によれば、大償権現別当幸林坊の時代に田中明神別当山陰家から神楽を伝授されていて（長享2（1488）年銘「神楽秘伝書」）、その後田中神楽は田中明神第48代別当善尊（万法院快尊）弟清賢のときに絶える。それ以降、田中明神に神楽を奉斎する際は幸林坊の後を引き継いだ大償権現別当佐々木家（現在の大償別当佐々木家先祖）が率いる大償神楽組中心で奉祀するようになる。寛政6（1794）年の田中明神の祭礼では、佐々木家別当が神楽を奉祀している記録がある<sup>(9)</sup>。

一 九月九日 天気能 例年通り 田中明神ノ祭礼一社一傳式相調 恒例の神事相努也。

神主越前守 社人織江 同織居 同浪江 助門人六吉 助人長作 助人火ノ又兵二

次ニ 冷シメノ御神楽ヲ奏 十三人

「山陰文書」

さらに、野口の法印と大償別当佐々木家との関係も「山陰文書」の中に見ることが出来る。

野口の法印が「山陰文書」に登場するのは、田中万宝院快永が亡くなった延宝6（1678）年5月の項であり、このとき野口の一寿院と大償の社家（別当佐々木家）が祢宜葬で万宝院を送っている。佐々木家別当と野口の一寿院は山陰家派生の同族とされ、元は両者とも社人であったが、一寿院は後に羽黒派修験として表記されるようになる。佐々木家と野口の修験が大償神楽に関わっていたのは大償権現別当幸林坊の時代からであり、神楽は大償の祢宜により支えられた。また野口の修験が旦那場とする範囲の社祠の神事には、大償神楽を伴って歩いていることが記録にある。「山陰文書」の文化10（1813）年の項では、田中山陰家が大迫三町初市における制札場前の市神祭祀を命じられ、大償神楽を引き連れて奉斎していることも記録されている。これは、祭祀者が田中山陰家でも野口の一寿院であっても、神楽は同族である別当佐々木家の大償神楽が担っていたことがわかる<sup>(10)</sup>。江戸時代の大償神楽は佐々木別当家の神楽でありつつも、祭祀者となる神官は佐々木家以外の同族の人物の場合もあり、そして野口の一寿院もこれに関わっていた。

### ②野口法印流神楽の誕生と盛衰

#### 一野口の法印 宝乗院善妙は実在の人物か一

一寿院の時代の後、野口の法印として名前が見られるのが宝乗院善妙（善明）である。小形信夫の調査によれば宝乗院は後に「宝鏡院」と名乗った時期があり、「寺社本末支配」「神職修験面

附」に「大迫村 一明院支配 羽黒山修験 宝鏡院」と記録されている<sup>(11)</sup>。内川目の田中には田中明神の山陰氏、および同所大償には三社大権現の佐々木社家があり、宝乗院はこれらと古い縁続きにあったと伝えられるが具体的な出自は不明である。この宝乗院が「大償内野口流式」と称して神道式に改変した新たな神楽を始める。

#### －資料からみる大償内野口式神楽の誕生と盛衰－

近世盛岡藩の宗教政策によって藩内の修験系神楽が神道化してゆくのは、藩の社家神道の傾向が増す寛政時期以降とされる。こうした時代背景を経て、藩政後期（文政年間（1818）～天保年間（1830））に宝乗院は、藩の意向に沿って新たに改変した大償内野口流式を唱える神楽を起す。その後、宝乗院ら神楽一党は天保の凶作にてこの時期3年間世話になった晴山（現在の花巻市東和町東晴山）の横川家（5代目横川儀右エ門のとき 当時37歳 明治14年没）にその礼として神楽を伝授して、天保6（1836）年には野口法印神楽の伝授書を授けている。この伝授書は現在も横川家に保管されており、神楽の内容を知ることができる（写真2）。また、野口法印流神楽が横川家に与えて行ったと伝えられる神楽道具なども保存されている（写真3）。その後、天保の大凶作により宝乗院の神楽組は離散して途絶えたことが伝えられるが、しかしながら晴山の横川家に野口法印流の神楽が伝えられたことで、ここからさらに神楽が伝播されてゆくこととなる（写真4）。



写真2 晴山神楽伝授書  
晴山神楽保存会所蔵（2017年4月 筆者撮影）



写真3 晴山神楽 宝冠  
晴山神楽保存会所蔵（2017年4月 筆者撮影）

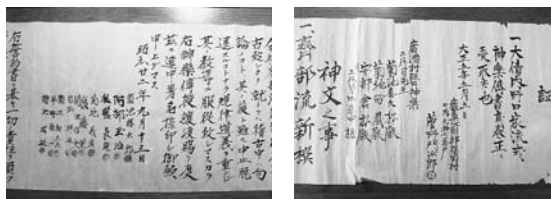


写真4 軽石神楽誓約書・神文  
軽石神楽保存会所蔵（2018年6月 筆者撮影）

### 3 伝授書について

晴山白山神楽の伝授所には大償野口家流式として、その演目を以下のように記してある。

前六番：鶏卵舞 白翁舞 黒叟舞 四弓舞 榊舞 野槌舞（現在は磐戸開き）

後六番：俳優舞 岩戸開舞 蛇退治舞 悪心退治舞 天降舞 朝敵退治舞

またこれに、権現舞の惣調を加えて、以下の「八拍子之事」としている<sup>(12)</sup>。

八拍子之事 宮調 商調 角調 徴調 羽調 半徴 半商 惣調（権現舞）

一方、岳神楽・大償神楽は、式舞（必ず最初に舞う六番）として、以下のように舞う。

式舞：鳥舞 翁舞（白翁） 三番叟（黒翁の舞） 八幡舞山の神舞・岩戸開き

裏舞：四人鳥舞 松迎 裏三番（後追い三番）裏八幡 小山の神 岩戸開き・本開き 稲田姫。

これに神舞・女舞・侍ものなどを選んで舞い、最後に必ず下舞と獅子頭を奉じて権現舞を舞う。菅原盛一郎は、「雨乞い水神の舞」「四弓の舞」他 11 種の演目は舞振りも舎文も他の流派には見られない独自のものとしているが、逆に岳神楽と同様の内容も配されていることを述べている<sup>(13)</sup>。つまり、舎文の内容は異なる点が多いが、早池峰神楽の影響も受けていることになる。

### 4 野口家流神楽の系譜と伝播の特徴

野口法印流神楽の流れを汲む神楽（大償内野口伝斎部流神楽）のうち、現行している 3 つの神楽組の概要を以下に記す。

#### ①大償内野口伝斎部流晴山神楽（花巻市東和町）

前述のように、天保年代の大凶作のとき、野口法印流神楽組が晴山（東和町東晴山）の富豪横川家に世話になった礼として天保 6（1836）年に 5 代目横川儀右エ門に神楽が伝授された。その後、晴山の神楽は鎮守白山神社の奉納神楽として横川儀右衛門から子瀬平政寛に嘉永 6（1853）年に伝授され、現在に残る（写真 5）。横川家には天保 6 年銘の野口善妙の神楽伝授書や、横川儀右エ門自筆の文書が保存されている。また、初代から使用していると伝えられる面や神楽道具などを保存している。この横川家から弘化 3（1846）年に広瀬村（現江奥州市刺区広瀬）の軽石へ、さらに軽石神楽から明治 14



写真 5 晴山神楽 横川瀬平の図  
晴山神楽保存会所蔵（2017 年 4 月 筆者撮影）

（1880）年に同村の鴨沢へ神楽は伝播してゆく。現在は人手不足のために権現舞と子供たちの神楽（シンガク）のみ継続している。

## ②大債内野口伝斎部流軽石神楽（江刺区広瀬）

晴山神楽の横川秀兵衛より弘化3（1846）年に、奥州市江刺区広瀬の軽石の菊池文太郎ら8名に神楽が伝授された。晴山神楽からの神楽伝授書の巻物を有している。当時、師匠を馬で迎えに行ったとの伝承あり。文久3（1863）年には、軽石の菊池喜久松へ、明治27（1894）年には阿部伴治へと神楽が伝授された。神楽は音石神社の奉納神楽となっている。火防祭（ヒブセ）行事が盛んで、以前は軽石地区の47軒の家をすべて廻っていた。10年程前からは会館に集まって祈祷を行っている。また、昭和30（1955）年頃までは、北上市口内・梁川・奥州市江刺玉里などにも祈祷に出掛けていた。神文（しもん）・誓約書を現代においても作成しており、神楽仲間に神楽を伝授するときも、他の地域に神楽を伝授するときにも伝授式を行っている。開始当時の面や神楽道具を保存している。弟子として、北上市口内草刈場（明治40〈1907〉年）と奥州市江刺区梁川（大正年間）に神楽を伝えている。現在は権現舞を伝承している。

## ③大債内野口伝斎部流鴨沢神楽（江刺区広瀬字谷内田鴨沢）

明治14（1880）年に軽石神楽から正式に免状を受け取り、氏神新山神社の奉納神楽として伝承している。獅子頭の尾の剣に神楽開始時期の「明治5年」と彫りこんである。弟子入りや座元が次の代へ譲られるときの伝授式がある。弟子入りの際は、「免付（めんつき）」というものに名前を書いて拇印を押す。座元が次の代に譲られ新しく変わる時には、そのつど「神文」に全員が名前を書き、血判を押す。これには「大償野口傳」とあり、大先生として大師匠の名前を書く。明治41年・昭和7年の神文も保存されてあるが、現在の神楽衆も作成しており、その儀式は続いている。道具類は座元が変わる時とは別に新しい代に渡していた。初代の担い手が、大正10年に道具を譲り渡したときの申し送り書があり、陣羽織・鎧・水引・天照大神の宝冠などを受け渡している。同じ流派では、ほぼ同様の道具を使っているという。演目は36幕。大別すると「式六番」以外は「裏舞」を含めて「式後」の舞と呼ぶ。明治31（1898）年銘「大債内神楽式」、明治31年「斎部流神楽本式」、明治41（1908）年・昭和2（1927）年・昭和7（1932）年の「神文事」、昭和40（1965）年・昭和51（1976）年・昭和56（1981）年の「免付」などを所蔵している。

これら晴山神楽・軽石神楽・鴨沢神楽、そして四反田神楽（文政－文保時代に伝授 註14）には、ほぼ同様の神楽伝授書が残されており、伝承した演目とその内容を知ることができる貴重な資料となる。また、弟子入りの際の誓約書や神文などをそのつど作成し、神楽の代表が変わる時や他地域に神楽を教えるときにも伝授式を行うなど、厳格な手続きをとっている。これらの手続きは、早池峰系神楽や周辺地域の他系統の神楽には見られず、野口法印流神楽のひとつの特徴

と言っても良いであろう。

## 考察

これまで、異なる時代に存在した野口の二人の法印（一寿院と宝乗院）にまつわる神楽祭祀の在り方の違い、そしてこのうち「齋部流野口法印流」と呼ばれた宝乗院の神楽の伝播と特徴的な継承形態について述べてきた。これを整理しつつ改めて野口法印流神楽について述べたい。

### ①「野口の一寿院の神楽」と「野口の宝乗院善妙の神楽」の位置づけ

まず、野口の二人の法印、一寿院と宝乗院のそれぞれの時代の神楽祭祀の運営の違いと、担われていた神楽について述べたい。一寿院の時代は、大償という地域にあって同族同士で協力する形で神楽祭祀が行われていたことから、おそらく一寿院の神楽もまた田中明神社神楽を踏襲した早池峰系の神楽を主体に行われていたことが考えられる。それは岳神楽や大償神楽と同様のものであったことが推測される。一方、化政期から天保時代にかけて行われていた宝乗院の神楽については、別に考えたほうが良い。宝乗院の神楽は、研究者諸氏が分析しているように、藩主の神道化の意向に合わせて改変された神楽が舞われていた。いわゆる修験の祈祷色の強い「早池峰系」ではない別流の神楽として舞われていたのであろう。なぜなら、岳神楽においてはすでに享保14（1729）年には吉田神道から裁許状を得て舎文の内容も神道化に改変されていたはずであるが、それにもかかわらず文化9（1812）年に修厳による「獅子舞神楽一党御差留」「氏神祭祀御差留」の沙汰を受けている。当時の盛岡藩主南部利敬の厳しい宗教政策のうえで、舎文の内容は改変されていても、おそらく神楽の舞振りや祈祷の行為そのものに修験の要素を含んでいたことが推測される。とすれば、もっとも神道化が強くなる化政期以降に改変された宝乗院の神楽は、舎文や舞振りにおいても吟味した内容になるはずであり、それまで早池峰山麓に伝承されていた修厳系の神楽とは異なるものであったろう。

これを分析するには、時代ごとの舎文と芸態の詳細な分析が必要であり、さらに時間を要する。野口法印流神楽が大償神楽の長い歴史の中に一時現れた縁の神楽なのか、それとも改変して新しく創造された早池峰流とは別流の神楽なのか、現時点では推測のみにとどまる。

### ②神楽の伝承形態について

そこで、もう一つの視点として神楽の伝承形態に（神楽の伝承に伴う契約）について着目したい。野口法印流神楽の流れを汲む晴山神楽・軽石神楽・鴨沢神楽は、これまで述べてきたようにいずれもほぼ同様の特徴的な「伝授書」をもって神楽を伝授されている。また、軽石神楽や鴨沢神楽においては、神楽衆になるにあたっての「免付」「神文」「誓約書」を作成している。これには「大先生」「先生」「弟子」というように神楽組内での師弟関係の段階を明示しており、代が変



わる度に署名と拇印や血判をつき新たに契約をかわしている。加えて、誓約書には脱退するときの罰則もあげられているものもある。岳神楽や大償神楽の流れを汲む一部の神楽には伝授書が与えられているがその事例は少なく、「免付」や「神文」まで作成している事例は早池峰系神楽には見られない。神楽衆として仲間に認められるための、この厳格にも思える契約こそが、野口法印流神楽の特徴であろう。なぜなら、野口法印流神楽の担い手は、大償神楽のような血族集団や同族集団ではなく、おそらく近隣地域の複数の修験や住民により神楽が担われていたことが考えられるからである。神楽は宗教活動である一方、経済活動でもあるために他人同士の集合体であるならば厳格な契約を必要とする。廻村巡業をしていた昭和初期の神楽の礼の相場は、「権現舞」米五升・「山の神舞」米一升・神楽宿の「前立ち（権現舞）」では米一升であり、経済的収入を得るのに大変効率のよいものであったと言える。弟子の神楽にもその名残が残っていることが推測される。

また、野口法印神楽は天保6年以降離散して消滅したが、その神楽は晴山に残され現代まで維持された。それは富豪であった横川家の財力によるものであろう。神楽はある程度豊かな庇護者がいなければ、単体では維持できない。岳神楽が田中明神から離れて独自に活動してゆくことができたのは、所属する嶽妙泉寺が南部藩から庇護されていたからである。岳神楽が廻村巡業をはじめ積極的に弟子を持つようになったのは、文化年間に藩政により妙泉寺から追放された数年間のことである。この頃には、大償神楽もまた廻村巡業を行っていることが文化9（1812）年の嘆願書からわかる。廻村巡業は布教活動であると同時に、所属を失った彼らの生活を支える経済活動でもあった。

ここで改めて、整理したい。田中明神別当山陰家と同族関係にあり合同で祭祀を行う事のできた大償神楽と宝乗院野口善妙の神楽とはその性格が異なる。宝乗院の神楽は、いわば里修験集団（もしくは住民）により、時代の流れの中で新しく改変された神楽を営まれていたことが考えられる。

このような状況から、少なくとも一寿院の神楽は早池峰系の神楽であった可能性は高く、宝乗院の神楽はそれを時代に合わせて改変した新たな神楽とする論が現状では妥当ではないだろうか。

## おわりに

本論では、野口法印流神楽像を明確にするために弟子筋の資料や先行研究を整理し、また調査により明らかになった特徴的な伝承形式から、早池峰大償神楽との違いを検討した。大償神楽と混同して捉えられている野口法印流神楽が早池峰流なのか否かという視点からは、明確な結論は出せなかったが、大償神楽とは別の神楽集団であり、少なくとも早池峰系の神楽を基盤としてこれを変化させていったことは間違いないと考える。

また加えるならば、野口法印流神楽では師弟間で伝授書・神文・契約書を作成することで神楽の担い手の統制をはかっていた。神楽の担い手の構成が他人同士だからこそ文字を使って保証する方法をとっていたことが考えられる。このような保証の方法は、現在における文字文化の活用のみでなく、新しい形式とも言える。

その神楽集団がどの系統に属するのかを判断する際に、舎文や舞い振りなどの芸態のみではなく、神楽の伝承法やその形式をも鑑みる事が重要であろう。逆にいえば、伝承形式を詳細に分析することで、その源流となるものを見出すことができるかもしれない。このことは、野口法印流神楽について考えるのみならず、今後の早池峰神楽の継承と伝播論を追求する上で、重要なことと考える。

#### 注

- (1) 「猿沢峠山伏神楽」『岩手県の民俗芸能』岩手県教育委員会編 2011 年所収 18 頁 野口法印流神楽が東和町晴山から奥州市、大東町と県南に伝播している様子を示している。
- (2) 『岩手の民俗芸能 山伏神楽篇』岩手県教育委員会編 1962 年 12 頁引用
- (3) 東日本ハウス文化振興事業団編『民俗ノート第 2 号 鴨沢神楽狂言集 附 神楽言立集』1994 年 111 頁～112 頁引用。忌部兼春創出「斎部秘伝神楽本記」についての出典は不明。
- (4) 森口多里『岩手の民俗芸能』岩手県教育委員会編 1962 年 12 頁引用
- (5) 菅原盛一郎『日本之芸能早池峰山伏神楽』東和町教育委員会 214-215 頁引用
- (6) 忌部斎部流神楽は「本式倭舞三番 大神楽日本舞四番 天岩屋大神楽七番のことであってこれは寛永のころ鹿島神宮卯第宮司則広が大償内の宝乗院に伝えたもの。」と説明される。  
内堀神楽の詳細は不明。田中神社は早池峰山の遥拝所。
- (7) 大阿久国賢「大償内野口斎部流鴨沢神楽の概要」民俗芸能学会編『民俗芸能研究第 10 号』所収 1989
- (8) 「山陰文書」とは、岳神楽や大償神楽のルーツとなる田中神社神楽の所在した、田中明神社神官山陰家の記録。現存する古い文書は修験時代のもので、それ以外は社家に復した第 50 代讃岐守則房の時代に書かれたものである。
- (9) 大迫町史編纂委員会編『大迫町史教育・文化篇』1983 年 267 頁<sup>(10)</sup> 前掲<sup>(10)</sup>273 頁～275 頁参照。
- (11) 森 毅『修験道霞戦の史的研究』名著出版 1989 参照。「寺社本末支配」篤焉家訓：市原謙助著 文化から天保年中に緒記録を渉獵して著した二十四巻本。「神職修験面附」：弘化・嘉永年中の書留、釜石市鈴子家（愛宕山大権現）所蔵。
- (12) 前掲<sup>(3)</sup>112 頁引用。
- (13) (5)「斎部流野口法印流神楽」の項参照
- (14) 四反田神楽は天保時代に百姓一揆加担の咎で解散。伝授書は現在東和町土沢神楽が保存。

#### 参考文献

- 本田安次『本田安次著作集 日本の伝統芸能 第 5 巻 山伏神楽・番楽』錦正社 1994  
千葉正平『鴨沢神楽の伝承と由来』1980 年  
東日本ハウス文化振興事業団編『民俗芸能ノート第 1 号』1993 年